

近代日本の名作文学と西洋の廉価版小説の影響関係

堀 啓子

An Influence between Japanese Modern Literature and Western Cheap Editions

HORI Keiko

1. はじめにー研究の起点と明治のベストセラーの背景

このたび研究助成をいただいたことを受けまして、表題の研究に専念致しました。本研究は、報告者が予てより持続させているテーマです。そのためこのたびの報告では、そのおおもとなるテーマが如何なるもので、どのようなかたちで持続し、また研究内容を講義にも反映させているかをお示しするために、本研究の中心的な部分を報告させて頂きたいと思います。

それは、新聞小説が娯楽として大きな意味を持っていた明治時代に、人気実力を兼ね備えた文豪、尾崎紅葉が名作『金色夜叉』をある西洋の小説をもとに『讀賣新聞』の連載小説として発表したという事実背景です。ただそれは、西洋の小説とは申せ、有名作家の名作文学などではなく、無名作家の廉価版の小説でした。

当時、尾崎紅葉は、日本近代文学草創期の立役者、新聞小説のスター作家でした。当時、新聞小説といえば新聞の看板であり、それを担当する作家は花形とされていました。じっさい現代とは異なり、経済紙や政党新聞などの一部の知識人向けの高級紙を除き、多くの人が読む一般紙では、新聞小説の人気売り上げを左右していました。そのため、各新聞は人気と実力を兼ね備えた作家を抱えて、売り上げ部数増加にしのぎを削っていました。たとえば、『東京朝日新聞』は夏目漱石を三顧の礼で迎え、〈探偵小説の父〉と称された黒岩涙香を『都新聞』（のちの『東京新聞』）が擁し、それぞれが特色を押し出した時代です。彼らは各新聞社に社員として入社することで専属となり、実力次第で待遇が優遇されていました。

新聞小説を日々書くことは大きなプレッシャーであったため、また現代とは著作権の意識も異なったため、当時の作家として外国の小説を下敷きとすること自体は珍しくはありませんでした。ただその作品が、無名の廉価版小説というのは珍しい例でした。

カリスマとしての紅葉

尾崎紅葉は江戸時代末に、現在の東京タワーのある芝大門で生まれ、明治と同じく年齢を重ねました。そして明治十八年、東京帝国大学予備門在学中の十八歳で〈硯友社(けんゆうしゃ)〉

という日本近代初の文学結社を学友らと立ち上げ、作家としてデビューします。この硯友社一派はその後めきめきと頭角をあらわし、後には文壇の一大勢力となりました。そして総帥として硯友社を率いた紅葉は「紅葉の政治力は原敬を凌ぐ」とまでいわれ、名実ともに文壇の寵児となりました。そして『讀賣新聞』に請われるままに大学を辞めて入社すると、『二人女房』『三人妻』『多情多恨』などの名作を次々に同紙上に発表します。紅葉の絶大な人気は、読者をして「讀賣の紅葉か、紅葉の讀賣か」と言わしめたほどでした。

こうして尾崎紅葉が、空前の人気を誇る『金色夜叉』の連載を始めたのは、明治三十年の元旦でした。そしてこの連載はライバル各紙が人気作を掲げる中、足かけ六年という驚異的な長期にわたります。その人気を示す有名なエピソードがあります。『金色夜叉』の愛読者である一人の若い女性が、病に冒されました。死期の近づいた彼女は「自分の死後、墓前にただ『讀賣新聞』を手向けてほしい」という遺言をのこします。若い彼女がこの世にのこした最大の未練は、『金色夜叉』の続きが読めないことだったのです。一見、奇矯なようですが決して熱狂的なファンの特別な例ではありません。ほとんどの読者が彼女同様、この作品に魅了され虜となっていたからこそ、これほど異例の長期連載が支えられたのです。

しかしながら数年の連載が続いた頃、病を得た紅葉はしだいに執筆を休みがちになります。押しも押されもせぬ大家となったこの頃、紅葉は同社の社長と同額の報酬を得ていました。そのため、紅葉が筆をとらないということは、『讀賣』の経営陣にとっては深刻な問題でした。そしてなかなか筆が進まない紅葉に、高額報酬を出すことを快く思わなくなります。看板としての『金色夜叉』に大枚をはたいた挙句、休載続きでは読者も離れてしまうからです。そのあたりの行き違いから、紅葉もとうとう同社を離れ、『金色夜叉』の続きは春陽堂という出版社の文芸雑誌『新小説』に載せることになりました。そうして『讀賣』に掲載した最終場面をまとめ直して同誌に載せ、新たに書き継ごうとした矢先、紅葉は斃れて不帰の客となってしまったのです。

ちなみに幕切れはヒロインの手紙で、結末としてもあまり違和感がないため、現代では『金色夜叉』が未完であることはあまり知られていません。ただこの区切りの良さは、あるいはこの先の連載が困難を伴うことを予測した紅葉による、深刻な病状を案じ応援し続けてくれているファンに対する、心配りであったのかもしれませんが。ちなみに、このとき『讀賣』の読者は、長年の功労者である紅葉を見限ったかたちの同紙の対応に不満を持ち、不買運動まで起きたほどでした。紅葉と『金色夜叉』は、読者にそれほど愛されていたということの傍証になりえるでしょう。

2. 〈下敷き〉を用いた経緯

さて先述のように種々の娯楽がなかった時代、新聞小説は人々にとって大きな楽しみでした。そのため高額報酬が約束され、華やかな注目を浴びる新聞小説作家たちは、半面では大変な重責に苦しんでもいました。読者の気持ちを日々惹き付け、次から次へと人気作を発表し続けなければならないからです。じっさい不評の場合、移り気な読者はすぐに購読を中止し、他紙

に目を移してしまいます。そのため連載の打ち切りは珍しいことではなく、念のため別の作家に予備的な作品を同時並行的に連載させていることも多かったほどでした。

そうしたなか、病を得るまでの紅葉は抜群の安定感を示していました。それは彼が新聞小説作家というプロ意識に徹していたためです。雑誌のインタビューにも「人生観が何うしたの、世界観が斯うしたのと、ひどく大業なことを云つてたつてしやうがない、其れで又小説が出来るもんぢやないんだ。」(『唾玉集』春陽堂 明治三十九年)と答えており、読者の「テスト」に合わせて書くことを心がけていました。そのいっぽうで「専門に商売でかくと云ふやうになつてからは、此の五年以来、非常に愉快で筆を執るといふことはありません。」(前掲書)と、その重圧についても語っていました。

そうした紅葉にとって、得難い武器となったのが英語力でした。のちに紅葉の愛弟子の小栗風葉は、師の言葉を「外国語の読める者は、何も幼稚な頭から生み出した愚にも付かぬことを並べて見るよりかせつせと翻譯をして見るが可い、翻譯をすると、原書の思想も味へるし、且文章の稽古にもなつて、一挙兩得だ」(「紅葉先生の門下教授法」『文章世界』明治三十九年一月)と伝えています。紅葉は卓抜した英語力で自ら多くの原書を読破し、数多い門下生たちにも、西洋の小説にふれることを推奨していました。そして紅葉自身、重訳を含めていくつもの翻訳を手がけ、あるいは構想の一部を借りるという翻案も発表していました。

紅葉は、一日の新聞小説原稿を仕上げるために六時間を要したといえますから、決して速筆ではありませんでした。その彼が、日々の作品を綴るにはスピードアップが大きな課題でした。しかし構想の補助があればそれは容易になります。それゆえ翻訳や、面白い洋書小説を〈下敷き〉とし、それを換骨奪胎する翻案は極めて魅力的だったのでしょうか。そうして代表作『金色夜叉』も、知られざる原典、英語で書かれた恋愛小説をもとにして書かれることになったのです。

3. 『金色夜叉』への影響

ただ、現在と異なって、〈下敷き〉を持つことへの罪悪感や居心地の悪さはない時代です。そうした文化の中で紅葉の時代の人々は、未知の西洋小説に出会い、従来の日本にはなかった文体や構想のダイナミズムに瞠目します。それを自然に受け容れながらもそのままではなく、日本の読者の嗜好に合わせて自分の言葉で綴り直し、喝采を浴びたのならば、その〈本歌取り〉はみごとな成功をおさめたといわれ、賞賛されました。現代ではあまり知られていませんが、同時代の多くの有名作家が、原作を明示することなく翻案やそれに準ずる作品を発表しているのもそのためです。

紅葉が『金色夜叉』の〈下敷き〉について語ったことを、親友の巖谷小波は以下のように回想しています。

同(紅葉)君は私等(硯友社)同人をつかまへて、いろ／＼な文學談の序に

『此間ある外国の小説を讀んだらかう云ふのがあつた。ある男がその初戀の女をいざと云ふ

場合になつて、有力な恋敵のために奪はれてしまった。男はそれから憤慨して、その結婚式の日、寺院で鳴らす鐘の音を聞くに耐へず、その聞えない距離まで身を避けたが、それから性質が一變して、恐ろしい冷血漢になつて、戀愛にかへるに黄金を以てし、これにのみ一身を没頭してしまつた。と云ふのだ。面白いから翻案して、今度の讀賣の小説に、使つてやらうと思ふのだ。』と話した。

『それはなるほど面白からう。』

と、皆も相槌を打つた事だが、それから間もなく讀賣紙上に、大々的の豫告が出て、讀者の首を長くさせたのが、即ちあの『金色夜叉』である。[()内は引用者に拠る。]

(『金色夜叉の真相』黎明閣 昭和二年)

原典についてはこの後で述べますが、じっさいに比較してみると『金色夜叉』の後半は明らかに原典から離れ、完全に独立した紅葉のオリジナルといつてよい展開となっているのです。

4. *Weaker Than a Woman* という〈下敷き〉

『金色夜叉』という極めて日本的なイメージの作品が、洋モノのヒントを得て創られた、という意外な印象があります。『金色夜叉』は雅俗折衷体という洗練された和風の文体で綴られ、ヒロインを初めとする登場人物の人品風体ことごとく純日本風であり、もちろん作中の名勝地も日本の名所となっています。斧鑿の痕を見せることなく洋風のストーリーを自家薬籠中の物としたところは、まさに紅葉の優れた技量でした。

『金色夜叉』は、美しいヒロインお宮が、彼女を愛する貫一との婚約を解消し、大富豪の富山に嫁ぐという話です。その後、宮に裏切られた貫一が恨みのあまり冷酷な高利貸となつたところから、このタイトルがつけられました。後半は、すっかり変貌した貫一と、富山と結婚したもの、その結婚を後悔し憂き日を送る宮に焦点があてられています。大変な人気作であったことから、紅葉の遺した覚書を参考にして弟子の小栗風葉が書いた『金色夜叉 終篇』(新潮社 明治四十二年)を初め、さまざまな続編が発表されたほどです。ほかにも詩や脚本、現代語訳、パロディー、果ては脇役の登場人物のその後を描いたスピンオフや英訳まであります。近年に至るまで映画化や舞台化も回を重ね、一世を風靡した作品です。富山の財力を象徴する「ダイヤの指環」や、貫一が別れ際に宮に告げた「今月今夜のこの月」といった名ゼリフは現代も人口に膾炙し、その愁嘆場となる熱海海岸に建つ〈貫一お宮の像〉を訪れる観光客は今も絶えません。

いっぽう、紅葉が下敷きとしたのは *Weaker Than a Woman* (女より弱き者) という十九世紀末の長編小説でした。バーサ・M・クレイ (Bertha M. Clay) という無名の作家による、廉価版小説でした。これはイギリスを舞台にした作品で、主人公は絶世の美女ヴァイオレットといました。この作品はヴァイオレットが幼馴染フィリックスと結婚の約束をしていましたが、その後に現れたオーウェン卿という富裕な貴族に見初められ、フィリックスを見限ってオーウェン卿と結婚するという話です。この貴族がダイヤの指環で財力を誇示する場面や〈熱海の海

岸)を彷彿させる見せ場も登場し、特に前半のストーリーラインは酷似しています。

異なるのは後半で、『金色夜叉』では恨みを忘れない貫一と後悔し続ける宮の人生が平行線をたどるのに対し、『*Weaker Than a Woman*』ではヒロインの夫が急死することからヴァイオレットとフィリックスの人生は再び交錯します。そしてこの二人を含め、登場人物が皆それぞれの信念のもとに幸福を追求していく、という話です。ただ、この二作の様相を決定的に分けるのは単なるあらすじの相違ではなく、それぞれのヒロインの意識にあります。ともに自分の意思で選び取った道に進んだ後、「全く後悔はしなかった」ヴァイオレットと、後悔のあまりに心身ともに衰弱していく宮とでは、人生への向き合い方がまるで異なっています。この正反対といってもよいほどの相違は、紅葉がイギリス人ヒロインを、日本人女性の姿に近づけて描いたために生じたものでした。

感情の起伏が少なく、割り切った思考を持つヴァイオレットをそのままヒロインの座に据えても、日本の読者の共感は得られなかったでしょう。苦悩を重ねる宮の姿にこそ、情に厚い日本の読者は共感し、とりわけ女性たちは紅涙を絞りました。『金色夜叉』は熱海の海岸の場まで有名ですが、じっさいにはその後のストーリーのほうがずっと長く続きます。そのため紅葉独自の後半のストーリーこそが読者を本当の意味で捉えていくこととなります。

『*Weaker Than a Woman*』は、波瀾万丈でこそあれ、『金色夜叉』のように読者の深い感情に訴えかけることはありません。ただ劇的な要素の累積は、通俗的ですが読者受けは充分で、その点こそが紅葉にひらめきを与えたのです。その意味では『金色夜叉』の誕生がこの作品に負うところは大きいといえます。ちなみに、この原題はフィリックスが無情に自分を去ろうとするヒロインに対し「ふつうの女性が心に持っている愛情を持たない君は、女より弱者だ」と告げたセリフに由来し、『ハムレット』の「弱き(脆き)者よ、汝の名は女なり。(Frailty, thy name is woman!)」をふまえたと思われます。ここには、ヴァイオレットをふつうの女性よりも劣った存在、とする否定的な意味がこめられており、そうした記号化されやすい明快さもこの原典の特徴だったといえます。

5. アメリカの廉価版小説

この原典は、先に述べましたように、後世にのこる傑作文学という類のものではありませんでした。そしてまた、そうしたことはこの作品には望まれてもいませんでした。ライト感覚のストーリーを持つ一時的な娯楽のための読み物であり、読者は次から次へとその快楽を求めて作品を読み捨てていくものでした。じっさい、それは出版社の目論見でもあり、彼らもそれに見合う量産体制に入り、廉価で大量に小説を販売するようになったからです。

日本の新聞小説もまた、一般の読者をまず惹きつけようとする原点は一致しています。ただ新聞小説の場合は、いかに読者の嗜好や新聞の売り上げが制約として課されていたとはいえ、当代名だたる文豪が心血を注ぎ、なおかつ多くの読者を熱狂させていた以上、作品個々の完成度は高かったのです。また後々まで余韻を残すほどの出来栄でなければ、何か月や何年にもわたる連載という長期戦は戦えません。

Weaker Than a Woman の作者バーサ・M・クレーは、そもそも人物としては存在しません。というのも、これはアメリカの出版社が所有した筆名でハウス・ネームと称されたからです。出版社が複数の無名の作家に作品を書かせ、この名前でもって出版します。そしてこれら複数のゴーストライターたちは、出版社が指示する傾向の作風で執筆します。カラクリを知らない読者はもちろん一人の作家の作品と認識しているのですが、多くの無名作家を一人の作家に装わせることで出版社は大量の作品を手にし、その名前を容易に売り出すことができました。そのため出版社はこうした便利なハウス・ネームを複数所有していたのです。

背景には、十九世紀半ばから末にかけての混沌としたアメリカの出版事情がありました。出版社は薄利多売の経営方針から、毎週あるいは隔週で小説を出版していました。当初それらは薄紙に刷られたタブロイド紙のような体裁で、数頁から数十頁が小さな文字でぎっしりと埋められ、たいていは読み切りとなっています。販売価格は十から二十セントほどの廉価で、ダイム (dime) という言葉が十セントコインを意味するため、ダイムノベルと総称されました。もとより一回ごとに読み捨てられることを想定したからです。

後にこうした読み物が人気を博すると、シリーズも多様化し、ペーパーバックにもなりました。しかし依然として二十から四十セントという一般の書籍の数分の一以下の安価な価格帯で売られ、装丁も簡易でした。そのため読者は読み捨て小説という認識を保ち続けたのです。なお、こうした廉価小説のシリーズは無数に存在しました。数を揃えるためにも無名作家やハウス・ネームの作品は不可欠で、有名作品はほとんどが海賊版であるばかりか、出版社同士も互いの作品を勝手に使いまわすような、乱脈を極めた時代でもありました。

6. バーサ・M・クレーの背景

そうしたなかバーサ・M・クレーは、圧倒的な人気を博した異色のハウス・ネームでした。もとはシャーロット・M・ブレン (Charlotte M. Brame) という、実在のイギリス人女性作家を軸としていたからです。敬虔なカトリック教徒の彼女は、キリスト教の博愛精神と貴族社会を描くことを得意しました。そして彼女の作品が本国のイギリスで売れ始めたことに気づいたアメリカの Street & Smith 出版社が、彼女の作品をアメリカに持ちこんだのです。このあたりの経緯は、いくつかの研究書で異なった記述があり明快ではないのですが、おそらくは本人の了解は得ず、その手続きも正式なものではなかったと想像されます。ゴーストライターたちは彼女の作品をわかりやすい手本として書き、なによりブレン本人が多作家であったため、結果的に基本路線の固まった水準の高い作品群が成立しました。そのため、クレーの名前で出された本は爆発的に売れ、伝説の作家と称されるまでになりました。

こうした廉価小説の、ペーパーバック型のものはその後、日本にもたらされました。それらは洋書に飢えていた若い文士たちを中心に多くの需要がありました。ライト感覚の小説なので英語でも語彙はわかりやすく、ストーリーラインもシンプルです。そうした読みやすい書籍の中から、彼らはお気に入りの作家を見つけ、その作品を翻訳や翻案の構想の原拠として扱っていったのです。

紅葉は、恐らくバーサ・M・クレーを気に入っていたのでしょう。じつは『金色夜叉』の二年前に連載し、〈讀賣の花〉と絶賛された『不言不語』もこの作家の *Between Two Sins*(1880s) の翻案と思しく、全体を通じて酷似した内容となっていました。

7. その後への影響

バーサ・M・クレーは、現代ではアメリカでも知る人はほとんどいません。しかし同時代には日本でも知られており、紅葉と同時代の知識人が何人もこの作品を愛読し、あるいは翻訳もしていました。特にブレムという実在作家に関しては、伊藤博文の女婿である末松謙澄が、英国滞在中にブレム本人の小説を入手し、帰国後に翻訳して話題となったことから、クレーがブレムのペンネームであるといった程度の認識は、同時代にもあったようでした。

確かな作品構成力と、波瀾万丈で劇的な大衆好みのストーリー、女性（もしくはそう装った）作家特有の視点など、この作家の作品には目新しく魅力的な要素が満載だったのでしょう。

紅葉がこうした手法で『金色夜叉』を爆発的なヒットに導いたことには大きな意味がありました。その後、こうした無名作品を原作とする翻案が増え、日本の近代文学発展に寄与しました。

こうした背景が報告者の研究のもとにあり、その後の翻案や翻訳の歴史のなかで、必ずしも有名作品を原書とはしない作品について考え、調査し、講義にも反映させています。そしてほかにも同様の多くの作品に焦点をあてることを、今後の研究の目標としています。

[付記] 本稿は、文化社会学部 2019 年度第 3 回（通算第 7 回）研究交流会（2019 年 10 月 23 日 14 号館 14-405 教室）で行った報告の記録である。